

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2012年2月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は創刊24年目
創刊1989年 No.272



Gustav Klimt Barbara Flöge, 1915 Öl auf Leinwand 110 x 110 cm Privatsammlung © Belvedere, Wien
Unteres Belvedere GUSTAV KLIMT / JOSEF HOFFMANN PIONIERE DER MODERNE

グスタフ・クリムト (1862年7月14日 当時のウィーン郊外バウムガルテンに生まれる～1918年2月6日ウィーンにて没する)

2012年 クリムト生誕 150周年 特別展

- ベルヴェデーレ下宮 『グスタフ・クリムトとヨーゼフ・ホフマン GUSTAV KLIMT / JOSEF HOFFMANN : モデルネのバイオニアたち』 3月4日まで
- ウィーン美術史博物館 『美術史博物館におけるグスタフ・クリムト GUSTAV KLIMT IM KUNSTHISTORISCHEN MUSEUM』 2月14日～5月6日
- レオポルト美術館 『クリムト個人 KLIMT PERSÖNLICH Bilder-Briefe-Einblicke』 2月24日～8月27日
- アルベルティーナ 『グスタフ・クリムト: 素描 GUSTAV KLIMT. DIE ZEICHNUNGEN』 3月14日～6月10日
- MAK オーストリア応用美術館 『クリムト、期待と充足 Klimt, Erwartung und Erfüllung』 3月21日～7月15日
- オーストリア劇場博物館 『反クリムト: ヌーダ・ヴェリタスと擁護者ヘルマン・パール Gegen Klimt. Die "Nuda Veritas" und ihr Verteidiger H.Bahr』 5月10日～10月29日
- ウィーン博物館カールスプラッツ 『クリムト: ウィーン博物館のコレクション Klimt. Die Sammlung des Wien Museums』 5月16日～9月16日
- オーストリア民俗博物館 『エミリエ・フレーゲのテキスタイル見本コレクション』 5月25日～10月14日
- キュンストラーハウス 『グスタフ・クリムトとキュンストラーハウス Gustav Klimt und das Künstlerhaus』 7月6日～9月2日
- ベルヴェデーレ上宮 『グスタフ・クリムト 150年 150 Jahre Gustav Klimt』 7月12日～2013年1月6日



杉本純の原子力の話 II

ウィーンと京都 5

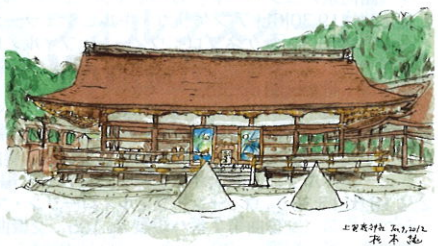


ウィーン程ではないが、京都の冬も結構寒い。その寒い年末も押し迫った十一月二十六日、福島事故に関する政府の事故調査・検証委員会は五百ページ超の中間報告書を提出した。委員長は「失敗学」で有名な畑村東大名教授、東電社員や国の関係機関職員など延べ四五六人に聞き取り調査を行っている。その内容の一部には「トールラス上部に足をかけた当直が履いていた長靴の一部が溶けた」などの生々しい記述がある。事故の発生が防げなかった原因として、東電や原子力安全・保安院が、「設計の想定を超える地震や津波によるシビアアクシデント対策」をとっていないかったことを挙げている。発電所内部での故障や操作ミス起因とする事故しか想定しておらず、自然災害に起因する事故への対策に重点を置けなかったことを二因とした。また、地震・津波とシビアアクシデントが同時に起こるという複合災害の発生を想定していなかったことも、今後の原子力発電所の安全対策を見直す上で重要なポイントとしている。さらに、これ

までの原子力災害対策において、対応に当たる関係機関や関係者、原子力発電所の管理・運営に当たる人々の間で、全体像を俯瞰する視点が希薄であったことが大きな問題だったとしている。

報告書の最後では、「二重事故が起きると重大な被害を生じる恐れのある、巨大システムの災害対策に関する基本的な考え方のパラダイム転換」を求めるとともに「想定以外のあることがあり得ることを認識すべき」と厳しく指摘しており、原子力関係者として正にその通りと感じた。本年夏頃の最終報告書では、政府中枢関係者の聞き取り調査の結果も含まれる予定であり、その結果も併せて注目されよう。

さて、十月号でウィーンと京都の共通点の一つに美味しい水の存在を挙げた。ウィーンでは一八七三年にフランツ・ヨーゼフ皇帝が作った水道のお陰で、アルプスからの美味しい雪解け水が飲める、カフェでコーヒーを注文するとコップに入った水が出てくるが、それがこの水道水である。外国の特に大都市では安全のため水道水は飲まないのが鉄則であるが、ウィーンは例外であり、美味しい水道水が飲めるのはウィーン人の誇りでもある。一方、京都は琵琶湖に匹敵する量の地下水に恵まれ、昔から多くの湧き水が有名である。お好みも湧き水を愛用している市民も少なくない。由緒ある料亭や蕎麦屋でも、湧き水を料理に利用しているところが多いと聞く。京都から毎日東名・名神を使って水を運んでいる東京の料理屋が



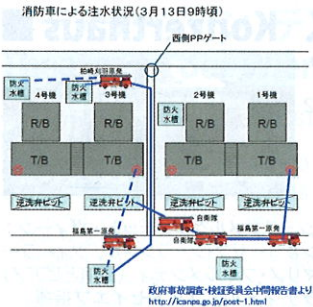
上賀茂神社 本殿

テレビで紹介されていた。伏見を始めたとする京都の名酒もこの名水に支えられている。水道も美味しく、〇九年に実施された京都市の千三百人以上の市民を対象とした「利き水」では、国産及び外国産のペットボトル水、水道水の三種の中で水道水が一番美味しいとの回答が最多の四割を占めた。ウィーンの水に対して、京都は軟水であるのが少々異なる。

余談であるが、世界遺産に登録されている上賀茂神社に初詣に出かけた。上賀茂神社訪問は初めてであったが、伊勢神宮に次ぐ我が国二番目の社格の神社であると知って有り難みを感じた。おみくじでは中吉を引き当てて大いに満足した。細殿（拝殿）前にある円錐形のきれいな「立砂」と神社内を流れる小川の清冽さが印象的だった。その雰囲気がいささかも伝わればと思い、素人のスケッチで恐縮であるが掲載させて頂く。

* 先月号の京大関係のノーベル賞受賞者で小林誠先生（〇八年、物理学）が抜けていました。お詫びして訂正します。

■杉本純
京大教授・元原子力機構ウィーン事務所長



消防車による注水状況(3月13日9時頃)
西側PP管ゲート
http://caesa.go.jp/roost-1.html